

中心街ストリートデザイン事業について

1. 背景・目的

- 八戸市では、人口減少や少子高齢化の進展による地域経済の停滞等の課題へ対応するべく、国が今後のまちづくりの方向性として提唱する、“**WE DO**”をキーワードに、街路を車中心からひと中心の空間へ転換する「居心地が良く歩きたくなるまちなか」の形成に賛同し、「ウォーカブル推進都市」に参画。（令和元年7月）
- 多様な人々を惹きつけ、賑わいや豊かな生活環境を創出する観点から、中心市街地の一部をまちなかウォーカブル区域とし、主要な事業として三日町・十三日町の区間をひと中心の居心地がよく歩きたくなるストリートへと再編することを目指すもの。

「居心地が良く歩きたくなるまちなか」づくりのキーワード

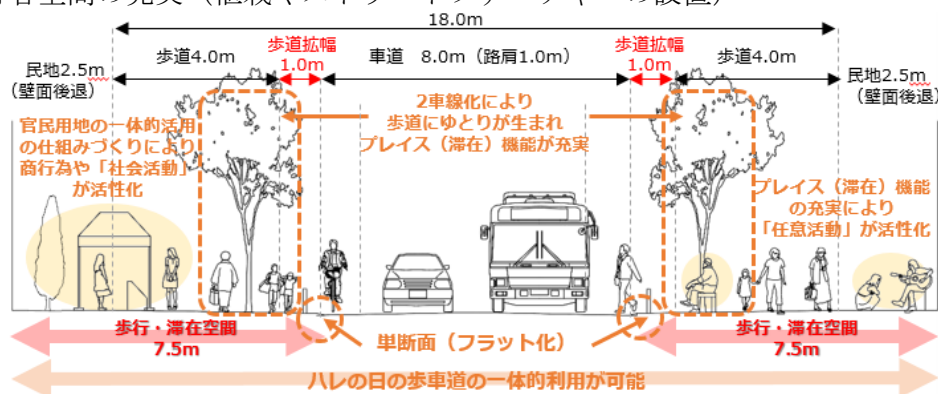
Walkable 歩きたくなる	居心地が良い、人中心の空間を創るとまちに出かけたいくなる、歩きたくなる。
Eye level まちに開かれた1階	歩行者目線の1階部分等に店舗やラボがあり、ガラス張りで見えたら、人は歩いて楽しくなる。
Diversity 多様な人の多様な用途、使い方	多様な人々の多様な交流は、空間の多様な用途、使い方の共存から生まれる。
Open 開かれた空間が心地良い	歩道や公園に、芝生やカフェ、椅子があると、そこに居たくなる、留まりたくなる。

2. ストリートデザインの基本的な方向性

- 三日町、十三日町の区間のストリートの再編にあたっては、リンク（通行）機能を一定程度維持しつつ、商業者や来街者が街に豊かに関わることができるプレイス（滞在）機能の充実を図ることで、安全で多様なアクティビティを誘発するストリートの形成を目指す。
- ストリートの構成要素として、公共街路のみならず、沿道の民地や建築物、上部空間を含め、街路空間全体をストリートと捉え、物理的様態（ハード）から活動・人的資源（ソフト）を包含した企画・構想、計画、設計、管理運営等を検討する。
- 検討にあたっては、再編後の変化や使われ方を想像し体験してもらうことを目的に、実際に「使ってみる」試行を繰り返すことで、ストリートデザインに携わるプレイヤーを増やしながら、将来的な計画を定めていく。

【ハード整備の具体案】

- 歩車道のフラット化
- 舗装面の一体的デザイン
- 車線を2車線化して歩道を拡幅
- 歩行者空間の充実（植栽やストリートファニチャーの設置）



ハード整備具体案のイメージ図

【ソフト事業の具体案】

- 既存の軒先での商行為
- マーケット実施に向けた実践的ワークショップの開催
- 都市再生推進法人等による官民用地の一体的活用

3. これまでの取組

- 令和3年8月～9月に、市で作成したストリートデザインビジョン（骨子案）を基に、三日町・十三日町の商店街関係者を対象とした意見交換会（計5回）を実施。その時のアンケート調査結果において、ストリートデザインの考え方に大半から賛同を得たことで、市として、当事業を推進していくこととなった。
- 令和4年度の県への重点要望事項として、「国道340号の歩車道フラット化と美装化による一体整備の促進」を要望。県からは、「市が現在進めている地元との意見交換や現地調査の結果を踏まえ、整備手法等について地元八戸市と一緒に検討していく」との回答あり。

4. 今後の取組

（1）ストリートデザイン勉強会の開催（別添チラシ参照）

前半3回は、街路の整備や使い方の事例に精通する有識者を招聘し、広く一般市民等を対象とする勉強会（講演及びワークショップ）を開催する。ストリートデザインマネジメント(※)の考え方を共有しつつ、中心街の商店街関係者や来街者等、参加者の様々な視点から「こういうストリートにしたい」という意見を出し合いながら、互いに学び合う。

※ストリートデザインマネジメント…人を中心とした地域特性に応じた街路の整備と使い方等を合わせて考えること

（2）ストリートデザインビジョンの策定

後半3回の勉強会は、三日町・十三日町の商店街関係者や八戸工業大学を中心に、前半3回の勉強会で出された意見等を反映しながら、線形案や舗装・工作物等といった意匠案、パース案を検討し、ビジョンを確定していく。

（3）国道340号街路再編実証試験

令和5年度以降に、ストリートデザインビジョンに基づく整備を行った場合の交通量への影響や、滞在性・回遊性の効果を検証するための実証試験を行う。



青森県では、ビジョンや実証試験結果を基に、道路管理者として詳細設計や整備を進めていく。
八戸市と青森県で、より良い街路づくりを連携して進めていく。